

# 心臓カテーテル検査説明書

## 1. 検査の必要性・目的

- 病気の重症度を判定し、治療方針を決定するため。
- 過去に受けたカテーテル治療や冠動脈バイパス術の確認造影のため。

## 2. 検査の方法とその特徴

### 【処置の手順】

- ①検査に使う血管のまわりを剃毛します  
(足の付け根にある大腿動脈を使う患者様の場合)。
- ②通常の場合、検査の30分程度前に、精神安定剤を1錠服用してもらいます。
- ③検査室へ向かう直前に、心電図検査を行い、点滴を行います。
- ④大腿動脈を使う患者様の場合、尿道カテーテルを入れます。
- ⑤大腿動脈を使う方はストレッチャーで、その他の患者様は車椅子で、検査室に向かいます。
- ⑥検査台上に横になります(仰向け)。
- ⑦検査に使う血管の周りを消毒します。
- ⑧検査に使う血管の周りに局所麻酔薬を注射します。
- ⑨各種カテーテルを用いて検査を行います。
- ⑩検査終了後、検査に使った血管の上を押さえて血止めをします。
- ⑪足の付け根の大腿動脈を穿刺した場合は一般に4時間後に、腕や手首の動脈を穿刺した場合は4時間後に、止血と安静のためのベルトをはずします。

### 【穿刺部位と安静度】

- ① 大腿動脈：足の付け根にある動脈で、最も一般的な穿刺部位です。合併症がおこる可能性は最も少ない場所です。複雑な検査を行う場合には、こちらから検査を行います。検査後、少なくとも4時間はベッド上での安静が必要であり、この間、足を曲げたりすることはできません。
- ② 上腕動脈：肘の内側にある動脈です。検査後、少なくとも4時間は肘を伸ばした状態で固定する必要があります。上腕動脈の近くに神経があることから、検査後の皮下出血などが強い場合には神経を圧迫して、痺れなどの症状が出る場合があります。大腿動脈と比べて、合併症の発生する割合がやや高いと言われています。
- ③ 橈骨動脈：手首のところにある動脈です。少なくとも検査後4時間までは血止めのためのベルトを用いますが、検査後も肘関節や手首に運動には制限はありません。①②に比べて合併が少ないと考えられていますが、血管そのものが細いためにごく稀に橈骨動脈が詰まってしまう場合があります。そのため、手のひらを栄養する他の血管の状態をあらかじめ確認します。万一、橈骨動脈が詰まった場合でも他の動脈から手のひらに血液が流れますので問題となることはほとんどありません。

## 3. 検査に伴う危険性・合併症

カテーテル検査に伴い、以下に示したような合併症が発生する可能性があります。

- 脳梗塞およびその他の塞栓症－動脈硬化がカテーテルにより碎け、脳に行く血管やその他の血管を詰まらせてしまうこと。
- 心筋梗塞－冠動脈の中に動脈硬化の碎けた破片が入り、心臓の筋肉が障害を受けること。
- 心臓損傷－カテーテルやガイドワイヤーで心臓の筋肉を傷つけてしまうこと。
- 血管損傷－カテーテルやガイドワイヤーで血管の内壁を傷つけてしまうこと。
- 神経損傷－血管の近傍を走行している神経を損傷してしまうこと。
- 穿刺部血腫－カテーテル検査に用いた血管の周囲に血液が漏れてしまうこと。
- 輸血を要する貧血。
- 仮性動脈瘤・動静脈瘻－穿刺部の動脈の壁が瘤状に膨隆したり(仮性動脈瘤)、穿刺部の動脈と静脈の間に瘻孔が生じたり(動静脈瘻)することがあります。局所の圧迫で治癒することもあります。治癒しない場合、局所の外科手術が必要になることもあります。
- 感染症。
- 電氣的除細動を要する重篤な不整脈。
- 体外式ペーシングを要する一時的徐脈（脈が極端に遅くなる状態）。
- 血管迷走神経反射を含む一時的な血圧低下（反射により一時的に血圧が下がってしまう状態）。
- 放射線障害－長時間X線を浴びたことにより皮膚に火傷ができること。
- 造影剤腎症：カテーテル検査時に使用する造影剤により腎臓の機能を障害すること
- 局所麻酔薬・造影剤アレルギー
- 死亡

死亡やショックなどの重篤な合併症の発生する割合は 2000～4000 例に 1 例程度とされています。